

句集

h a n a n o m a d o

花の窓

赤堀洋子



文學の森

句集

花の窓

赤堀洋子



句集
花の窓^{はな まじ}

発行 平成二十七年一月十五日

著者 赤堀洋子

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

〒一六九〇〇七五

東京都新宿区高田馬場二一一一 田島ビル八階

tel 03-5292-9188 fax 03-5292-9199

e-mail mori@bungak.com

ホームページ <http://www.bungak.com>

印刷・製本 小松義彦

©Akabori Yoko 2015. Printed in Japan

ISBN978-4-86438-385-1 C0092

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

句集 花の窓*目次

序に代えて 大坪景章

第一章 鯉起し

第二章 桐の花

第三章 乗込鮒

第四章 甘茶蔓

第五章 神渡し

第六章 花の窓

詩集 さくら 赤堀瑞希

あとがき

238 231 203 161 121 85 51 15 1

序に代えて

赤堀洋子さんの第一句集『花の窓』の出版、おめでとう。俳句で「花」といえば「桜の花」をいう。庭の桜がよく見える窓という意味だろう。悪くもないが少々平凡かな、と思った。とたんにハツとした。

花の窓遺影へ開けておきにけり

この句は句集第六章の題名であり、その九句目にある句である。この章は

夫も子も現れよ真冬の流星群

で始まり、

子落しの獅子の大口寒詣

一人居の部屋に眩しき雛の灯

老梅の脂たらしつつ咲きにけり

そして「花の窓」と続くのだ。

今年の春の彼岸に、私は妻と息子と三人で市川市にある名刹、中山法華経寺へお参りした。桜には少々早いが、この寺には因縁がある。私は日蓮宗の僧の長男であり、この荒行寺には父も弟たちも、寒行のお世話になっている。本堂前でお参りし、石段を降りようとしたらばったり、洋子さんとぶつかるように出会った。

そうか、ここには娘さんのお墓があるんだった。新墓の売り出しがあった。洋子さんが檀家になったと聞いたことを思い出した。数年前、ご一緒に俳句会に出ていられたその若い子が、平成二十三年に亡くなられた。そして次の年に、写真作家のご主人が旅立たれたのだった。二十二年には義

父との別れ……。

そんなことであるのか。洋子さんはただ一人残された。

句集『花の窓』はもっと早くに出されなくてはならなかったのだ。法華経寺のお墓の前で、私は動けなかった。恋猫が二組、眼を光らせていた。

句集の序文にこんなことを書いてよいものだろうか。しかし、この句集は赤堀洋子の永年の営みであると同時に、娘や夫も共にする一家族の声なのだろう。

亡き夫の好みし野蒜箱で着く (平成二十五年)

二羽の鷗藻の花分けて進みけり (〃)

笑まひたる円空仏の眼の涼し (〃)

盥の月うさぎの影の濃かりけり (〃)

命日の竜胆へ蜂潜りけり (〃)

句集には夫の写真作家赤堀禎利氏の作品も写真で参加している。ご覧になつていただきたい。

赤堀洋子さんは昭和十六年大阪生まれの七十三歳。甲府で戦災を受け、共立薬科大学卒業後、東京都立大・大学院で植物生理化学を専攻した理学博士である。平成十七年と十九年には中国吉林農業大学で家政学の一部を集中授業している。

夫君とは互いに大学院の学生のときに結婚、一人娘と三人の平和な学究生活が続いた。しかし専攻を生かした就職口がなく、悩んでいるときに友人に誘われ、昭和五十八年「風」の俳句会に参加、近頃の千葉の長沢ふささんに師事した。

図書館の窓ガラス打つ松の芯

(昭和六十年)

霜 傷みせし 侘助を掌に

(昭和六十一年)

山 迫る 琴糸の里 蟬しぐれ

(平成二年)

鯉 起し虹を残して去りにけり

(平成八年)

雪 原を紅走る日の出かな

(平成十年)

本句集第一章「鯉起し」入章の初期の句である。洋子さんの句歴から見

れば初期だが、十五年余りの作品だから、相応にしつかりした句が残っている。第一句の「ガラス打つ」、二句目の「掌」、そして五句目の「紅走る」まで、句歴三十余年の今日、果たして出来るかなと思うほどの完成度ではないか。

滝凍ててもつとも淡き藍の色
(平成十二年)

冬萌のはこべ土竜の土に浮く
(平成十四年)

母の墓へ水に浮べて桐の花
(平成十五年)

乗込鮎水漬きの葦を飛び越せり
(平成十六年)

病める師に五加木の若芽届けたし
(平成十九年)

「五加木」は五加とも書く。山野に自生する低木で幹に鋭いとげがある。若葉は食用になり、乾した根は漢方の生薬である。その「若芽」を病める師に……と作者。師は長沢ふささんであろう。この年、高齢で亡くなられた。「風」の沢木欣一先生、ふささんが敬した細見綾子先生、共に旅立たれ、「風」は「万象」になっていた。発行人の私は、すぐ近くにいる赤堀

洋子さんのことは忘れ、全国各地の仲間に目を奪われていた。二十人を超える仲間の句集刊行のお手伝いをしながら、すぐ近くにいるこの人のお役に立つことをなにもしなかった。

今、改めて洋子句を見、その完成度に驚いている。申しわけないことである。

螢 守児の掌にそつと螢のせ

(平成二十年)

草叢を雉の頭が走りけり

(平成二十一年)

立春大吉上野の山を闊歩して

(平成二十二年)

甘茶蔓にぎやかに噛み秋うらら

()

雪吊のぴんと張りたるゆとりかな

()

「螢」「草叢」「立春大吉」「甘茶蔓」「雪吊」。こんなに明るく、自然と人工の、いのちの躍動が、さりげない日常の中で、詩としてうたわれるのか、とうれしくなる。

その平成二十三年三月十一日、私たちは日本列島の一大異変を眼前にし

たのだった。あの東日本を中心とした大地震と大津波、そして原子炉の異変の災禍。しかしそれと全く関係なく、赤堀家を訪れる不幸を、だれが知ることが出来るようか。

前年の平成二十二年に洋子さんの義父、二十三年にただ一人のお嬢さん、二十四年に写真作家の夫君が亡くなられるのである。先にも述べたが娘さんはひととき、私たちと一緒に俳句会に出ていられた。洋子さんはただ一人となった。

山繭のみどりの薄れ春立てり (平成二十三年)

青田波押し寄せてゐる墓一基 (〃)

娘子を連れ給ひしか神渡し (〃)

墓の上いつまでも舞ふ枯葉かな (〃)

立春の雀にこゑをかけらるる (平成二十四年)

亡き子への土産としたり赤詰草 (〃)

子の墓へ釣瓶落しを来りけり (〃)

虫時雨森の上には双子星（平成二十四年）

落葉しぐれくぐりて野辺の送りかな（　　）

亡き夫の砥ぎしナイフよ柿を剥く（　　）

市役所を出る足重し返り花（　　）

点滅の聖樹の居間に一人かな（　　）

これら十二句を含む第五章の題名は「神渡し」である。「神渡し」という季語は、出雲大社に渡る神々を送る意で、旧暦十月に吹く西風、と辞書にはある。

句集最後の第六章は、句集名と同じく「花の窓」とされている。

花の窓遺影へ開けておきにけり（平成二十五年）

から採られているのだが、その他に次の句などがある。

夕燕茜の空に見失ふ（平成二十五年）

教へ子も来て迎へ火を焚きくれし（　　）

夕 蝸 夫 と 子 の 忌 を 修 し 来 て （ 〃 ）
鳩 胸 の 大 仏 様 に 冬 日 差 （平成二十六年）

『万象』平成二十六年七月号の洋子さんの句は

新緑や白磁の富士のさだまれる

である。これらの句に私はどのような鑑賞を捧げられようか。限りあるこの世を生きて俳句を楽しむ合うことを、祈るばかりである。

平成二十六年九月

大坪景章

句集 花の窓*目次

序に代えて 大坪景章

第一章 鯉起し

第二章 桐の花

第三章 乗込鮒

第四章 甘茶蔓

第五章 神渡し

第六章 花の窓

詩集 さくら 赤堀瑞希

あとがき

238 231 203 161 121 85 51 15 1

カバー・口絵写真
装丁

赤堀禎利
宿南 勇

句集
花の窓